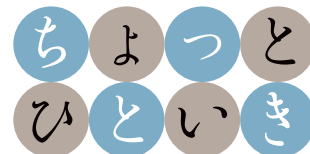


山本 健慈

YAMAMOTO Kenji

和歌山大学
学長



ジョブズ氏の メッセージ

「あなた方の時間は限られています。だから、本意ではない人生を生きている時間を無駄にしないでください。ドグマにとらわれてはいけません。それは他人の考えに従って生きることと同じです」「そしてなによりも大事なことは、自分の心と直感に従う勇気を持つことです。あなた方の心や直感、自分がなにをしたいのかも知っているはず。ほかのことは二の次で構わないのです」

これは、先日亡くなったスティーブ・ジョブズ氏による2005年6月のスタンフォード大学卒業式でのスピーチの引用である。

自分の学生時代を含め大学で45年、運営に関与する共同保育園で25年の間、乳幼児から青年・学生、そして親たちを見続けてきた私は、ジョブズ氏の言う「自分の心と直感に従う勇気を持って」という部分に深く共感する。

精緻に仕組みられた学校教育システム、それを求めてきた日本の産業社会、それに深く従属する子育て世代の「わが子への管理」は、子どもたちの「自分の心と直感に従う勇気」を奪ってきたといっても過言ではない。

生誕間もない幼いヒトは、「心と直感」にのみ従う個性的な動物である。勇気があるからではない、動物であるヒトの自然なのである。「心と直感に従う」動物としての自然な時間の積み重ねによって、ヒトは、自己の個性に気づき、それに誇りが持てる人間となる。

しかし残念ながら、いま幼いヒトが人生の時間を積み重ねる中で出会う大人たちのほとんどは、大人自身が描いた道筋に従うものを「評価」「賞賛」し、子どもは、その「評価」「賞賛」に「溺れる」。この経験は、「心と直感に従う勇気」を育てるところか、むしろ削ぎ落としていく。好奇心も冒険心も削がれ、想像力も創造性も育たない。

いま「グローバル人材」を待望する議論が盛んである。この時代の課題に果敢に挑戦する若者が育つ環境を醸成する上では、ジョブズ氏の言う「自分の心と直感に従う勇気」を鼓舞するメッセージに、教育者も経済人もならう必要がある。

なぜなら、「グローバル人材」とは、多様な文化、多様な歴史が交錯する世界の中で活躍できる人間であるからである。彼らは、

他者との衝突を恐れず、そして対話と調整ができる人である。この能力は、幼いころからの「自分の心と直感に従う」経験の中で、たくさんの他者との衝突を繰り返し、対話と相互理解、相互承認の経験を通して培われる。大人の「評価」と「賞賛」に「溺れ」、「内なる声がかき消された」生活のなかでは培われない。

かくいう私は、よわい六十を過ぎたシニアであるが、私たちこそジョブズ氏のメッセージに耳を傾け、「自分の心と直感に従う勇気」を持ち、現代に立ち向かわねばならないと思う。自分にその勇気なくして、若者にのみ求めるのは説得力がないことは自明であり、学生の前に立つ資格はないと思うからである。

